

05_ 女を泣かせた話。決意のワケ

どうも、高橋りょうです。

これまで、

「美女の性的魅力にやられるな！」

という話をしてきましたよね。

そんな魅力を目の前にしても、
冷静な態度でいるクールな男になれ、と。

(でも、内心はすごく魅力を感じている。)

でも…。

たぶん、
あれを聞いても、

「それは分かりますけど…」
「でも、難しいですよ…」

というのが、
ホンネではありますか？

“論理的には分かる。”

“でも、感情的には理解しがたい。”

これが、
大方のホンネでしょう。

男なら、当然です。

前にも話した通り、
これをするのは、並大抵のことではないんです。

こんな話をする僕自身も、完璧にはできません。

トレーニングによって、

日々、100%に近づけている、という感じです。

さらに。

下心だけで女性に近づき、
結果的に傷つけた経験も僕はしています。

それが、
僕自身の痛みとして残っていて、

“なぜ、女性は下心を感じる男性を毛嫌いするのか？”

という理由も、

感情的な理解として府に落とせています。

この辺りの女性心理は、
論理的な勉強で理解した、というより、

女性に直接教えてもらった、
という方が、僕の中ではしっくりきます。

...

なので今日は、
思い切って、僕の過去の苦い思い出をシェアします。

僕の体験を、
追体験してもらうことで、

あなたには、
論理的な理解を、さらに上のステージである
感情的な理解へと、昇華していただければ、と思いま
す。

ということで、今日の内容は、

『女を泣かせた話。決意のワケ』

です。

ぜひ、最後まで読み進めてください。

...

話は、僕がまだ、
女性経験が浅かった青二才の頃。

当時、付き合っていた彼女がいました。

その子は、

「りょう君と一緒にいると、すごく安心するの。」

そんな嬉しいことを言ってくれる、
すごくいい子でした。

付き合ったキッカケは、
彼女からの告白。

…とは言っても、

直接、好きだとは言わずに、
言葉を濁した感じで、
僕に想いを伝えてくれました。

彼女の見た目は、

普通よりは、ちょっとだけ上ぐらい。

お世辞にもタイプだとは
言えませんでした、

それでも、
「まあいいか」、と思えるレベルでした。

当時、僕に彼女はいませんでした。

前の彼女と別れてからの時期が長く続き、
ちょうどさみしさを感じていた、
そんなタイミングでの、彼女からの告白でした。

彼女の想いを察し、
僕の方から、誘い出しました。

美味しいごはんを食べられるお店に行ったり、
映画を観に行ったり。

2～3回、デートを重ねてから、
ホテルにも連れて行きました。

女性は、一度、体を重ねると、
ますます自分を好きになります。

「終わった後、一緒に寝てる時間が、すごく安心した

よ ^^」

彼女を送り届けた後、
そんなメッセージが入ってきました。

それを読んで、僕自身も、すごく嬉しい気持ち
になっていたのを覚えています。

自分という存在で、
誰かが喜ぶ、というのは決して悪い気はしないもので
す。

でも…。

僕は、彼女のことを…。

“都合のいい女”

としてしか、
見ていませんでした。

...

自分と一緒にいると、安心する
と言ってくれる彼女のことは、確かに「好き」でした。

でもそれは、

「恋愛感情」ではなく、

例えて言うなら、
自分になついてくる、
幼い女の子に対して抱く気持ちに近い。

「好き」という気持ちは、
彼女への“温情”に近い感情でした。

自分を好きだと言ってくれる
彼女の気持ちを利用して、僕は、

「何事も、経験だ。」

と自分に言い聞かせながら、
その実（じつ）、

・女をセックスで喜ばせる練習になる

- ・ 自分の性欲も満たせる
- ・ さみしい気持ちを紛らわせられる

そんな下心から、
彼女の想いに応えた、というのが、
本当のところでした。

結局は、彼女の「身体」を求めた。

一人の女性として
好きだという気持ちは、1 ミリもなかった。

心のどこかで、
彼女の気持ちを踏みにじっているような

罪悪感がありました。

そんな僕の愛情のなさが、
おそらく言葉や態度に出ていたのでしょう。

彼女は、だんだんと、
僕との関係に、疲弊していく様子を見せはじめました。

それがある一定以上まで達し、
もう、付き合い続けるのは難しいと判断した僕は、

「もう、別れよう。」

と、彼女に告げました。

彼女は、泣いていました。

最後の日に、
彼女を送り届けた後、またメッセージが入ってきました。
た。

「もう、気がない子には誘わないでね。」

「私、すごく傷ついたから…。」

そんな忠告をされました。

...

“ヤリ捨て”

こそしませんでした、
彼女にとっては、それに近い、

ものすごく傷つく思いをしたに違いありません。

僕と付き合っている間、
彼女は、ずっと分かっていたんです。

「自分は、愛されていない」

と。

「愛しているよ。」

のフリはしていました。

誕生日にプレゼントを渡したり。

彼女が行きたいと言っていた場所へ連れて行ったり。

夜は、愛撫して、たくさんキスしたり…。

でも、そんなのはすべて偽り。

彼女は、それを感じ取っていました。

ウソは、バレるものです。

...

なぜ女性は、
下心を感じる男を毛嫌いするのか？

それは、

「愛のないセックス」

を強要されるような、
不快感を抱くから、です。

女性は、
好きな男性から愛されることを
心の奥底から望みます。

その先の、セックスを望みます。

そう。

“愛されていること”

が前提なんです。

これは、あなたが

「この女性、すごくタイプだ！」

と思った美女であっても全く同じです。

たとえ好きな男性であっても、

愛のないセックスは、真っ平。

だから、

下心を感じる男を毛嫌いするんです。

でも哀しいかな、男は

「愛」なしで、
セックスができてしまいます。

女性の膣の中でペニスをピストンさせ、
中で射精することで快楽を覚えるように、
身体が設計されています。

それは、生物学的に、
より多くの異性に自分を種を植え付けて、
子孫を残すようにと、

DNA に書き込まれているため、です。

酷い言い方をすれば、
溜まった精子を排泄するための、
「肉便器」として女性を見ることができる。

...

男女の間には、
これほどの違いがあります。

しかし、
それを言い訳にして

「仕方なかったんだよ。」

と、済ませるつもりは毛頭ありません。

これを教訓とし、
何かを学ばなければなりません。

...

彼女との関係は、
結果的にはダメになってしまいましたが、

しかし僕は、彼女と出会えて良かったと、

心の底から思っています。

彼女のおかげで、
女性のことを、より知ることができた。

そして、
自分自身の中に潜む
「闇」についても知ることができた。

たとえ温情を感じた女性であっても、
いざ、身体の関係を持ってしまうと、

男としての性欲を満たすために、
女性を利用するような

酷いことができる自分がいる。

その結果、
女性の心を深く傷つけることができる。

そんな負のチカラを
持っていることを知りました。

本当に、
気を付けなければいけない。

しかし、このチカラは、
裏返せば、「光」となります。

どういうことか？

影（＝闇）は、
光のある場所でなければ
生まれません。

光が強ければ強いほど、
影は濃くなるのです。

そう。

先ほど、負のチカラと表現しましたが、
使い方さえ誤らなければ、

僕たち男は、
このチカラを使って、
女性を幸せにすることができます。

女性が求めているのは、

“好きな男性から愛されること”

“愛のあるセックス”

なのだから、

愛情ありきで、

性欲を満たせばいい、

という結論に至ります。

僕たち男は、

“女性を、肉便器として観る”

という側面も、確かに持ち合わせていますが、
そうではない部分も、同時に持ち合わせています。

...

そんなこともあり、

今の僕は、女性を、
ただの性的な側面だけで
観ることは、もうやめています。

たとえ、
自分にとってドタイプ S 級美女であっても、
それは同じ。

ついつい男として、
その女性のことを性的対象として
観てしまいますが、それは往々にして、

「バイアス」

をかけながら、観ていることがほとんどです。

(※バイアスの意味が分からなければ、検索してみてください。)

つまり、

偏ったものの観方で、

その女性のことを見ている、と。

本当に、その女性の身も心も手に入れたいなら、
ありのままの彼女を観る必要がある。

その「観るチカラ」を養う必要がある。

そういうことです。

...

ということで、今回のメッセージは以上です。

次回からは、

僕たち男が持って生まれたチカラを使って、
どう女性に、本能的魅力を感じさせていくのか？

という部分を

解説していこうと思っています。

つまりは、

「心の闇を光に変える方法」、ということですね。

ぜひ、楽しみにしていてください。

ではでは。

ありがとうございました。